

〈書評〉

山中弘 編
『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』（弘文堂、2020年）

鈴木 耕太郎

〈Book Review〉

**YAMANAKA Hiroshi (ed.), *Modern Religion and Spiritual Market*,
Tokyo:Kobundo, 2020**

SUZUKI Kotaro

本書を書評するということに怖さを感じている。本書は「現代宗教の動態と変容を「マーケット」という視点から論じようとする」（山中、p.ii）ことを目的としているが、そうしたことに今まで触れてこなかった評者は門外漢に過ぎない。何卒、ご容赦いただきたい。

ただ、それでも相応の意気込みをもって本書の書評を引き受けた。というのも、本書を通じての学びが評者にとって非常に大きいものであったからに他ならない。そのような意味で本書を評することに怖さを覚えつつ、また紙幅の関係上、本書収載論考（後述）すべてに触れられないことを断りつつ、以下、微力ながら本書の魅力を伝えることができれば幸いである。

さて、本書は編者山中による序論に始まり、3部構成・全17本の論考で構成されている。以下、やや紙幅を割くが紹介したい（なお、各論考の副題は紙幅の都合上、省略した）。

序論：現代宗教とスピリチュアル・マーケット（山中弘）

第Ⅰ部：パワースポットとスピリチュアル・マーケット

- ・ジェネリック宗教試論（岡本亮輔）
- ・消費される場所、脱商品化される旅（鈴木涼太郎）
- ・パワースポットのメンタリティ（大道晴香）
- ・二〇一〇年代のスピリチュアル市場における先祖供養と墓参り（問芝志保）
- ・亡き人を思う供養の祭りへ（村上晶）

第Ⅱ部：聖地の変容とツーリズム

- ・近代日本の鉄道と社寺参詣（平山昇）
- ・ツーリズムによる聖地運営システムの構築（卯田卓矢）
- ・「山伏文化」の商品化・資源化（天田顕徳）
- ・長崎の世界遺産とかくれキリシタン（山中弘）
- ・アニメ「聖地巡礼」の生成と展開（今井信治）
- ・神々の過疎化（門田岳久）
- ・戦間期都市近郊地域社会と神社聖地論（畔上直樹）
- ・聖地巡礼ツーリズムにおける「生きられた聖地」と「想像された聖地」（外川昌彦）

第三部：グローバル化とスピリチュアル・マーケット

- ・ウスターズたちのスピリチュアル・マーケット（安田慎）
- ・ノスタルジック・ニューエイジ（河西瑛里子）
- ・現代チベットの菜食主義運動と牧畜社会（別所裕介）

このように、本書は多様な論点から広く現代宗教を捉えようとしているのである。以下、収載されている中からいくつかの論考に触れていきたい。

第Ⅰ部は、現代社会においてすっかり市民権を得たと考えられる「パワー・スポット」に関する論考群となっている。まず、パワー・スポットが脱宗教的な場として認知され、機能していることを示したのが岡本論考である。さらに既存の宗教組織である社寺もまた、そうした脱宗教的な場を求める「信仰なき訪問者」を受け入れることで、「世俗の市場論理の下に宗教的な言説と空間が再編成されている」（p.43）と説く。重要な指摘といえよう。また、パワー・スポットをめぐる人間の欲望（と禁欲）に着目した大道論考も、現代におけるスピリチュアル的言説を的確に捉えている。現在、売り出されているパワー・スポット関連の書籍で説かれている言説を分析した大道は、自己本位的な利益を求めつつも、自分だけは他者とは違い自己本位ではない＝だからこそ願いが叶う、といった構造が見られることを指摘する（pp.79-81）。一見するとすぐに破綻しそうなものだが、現代のパワー・スポットをめぐるのは、自分の相性にはあわない「行っってはならない」スポットが存在する、という言説も広く唱えられているとも指摘する（pp.75-78）。つまり、こうした言説が付加されることで、パワー・スポット探求は（少なくとも、それを求める側の間では）破綻なく続くのである。こうしたメカニズムを明らかにした点は大きい。

第Ⅱ部は観光、ツーリズムと「聖地」の問題に焦点が当てられた。すでに『鉄道が変えた社寺参詣』（交通新聞社、2012）を上梓している平山は、まさに近代化に伴う交通と信仰の交差を論じている。鉄道を利用することで増えた「普通の参詣者」が大災害（関東大震災）を契機に社寺に宗教性を強く求めるようになる、あるいは行楽本位であった参詣者が「神聖さ」を強く求める（その神聖さを楽しもうとする）ようになると指摘しており興味深い（pp.144-146）。つまり、不特定多数の参詣者による「霊場の「俗化」」の次の段階として「一般の参詣客（大衆）の側か

ら「聖性」を求める動きが生じる場合がある」というのである（p.146）。聖地の俗化をもたらした側が、一層の聖化を期待するという構造は、現代でも一般的にみられる光景といえよう。また聖地における観光、地域振興と宗教的聖性の維持との間で住民・行政が揺れ動くさまを浮かび上がらせた門田論考は、地域政策学部地域づくり学科に所属する評者にとっては示唆深いものだった。門田は「神の島」と称される沖縄県久高島が過疎により祭祀の担い手が減少し、「神」もまた、いなくなりつつある」現状を指摘したうえで、逆に旅行市場では「神の島」イメージが強化され、行政も島民もそのイメージを引き受けているとする（pp.237-239）。その結果、「神の島」の聖性を求めた観光客により、島の伝統宗教とは異なるスピリチュアルな実践活動が島の聖地でなされるようになる。こうしたなかで、島の正統な歴史や宗教を護持したい島民、島の聖性について観光資源化は打ち出さないものの魅力に気づいている行政、そして島にスピリチュアルな聖性を求め実践している観光客、という位相により「神の島」というキーワードが微妙な差異をもって用いられていることを指摘するのである（pp.245-246）。このように「神の過疎化」を食い止める（＝祭祀の担い手の減少を食い止める）ために、神が住まう場を「消費」する層（観光客）を受け入れざるを得ない、という図式が当てはまる地域は少なくないだろう。

本書の締めとなる第Ⅲ部は、日本以外での国・地域におけるスピリチュアル・マーケットの現場に焦点を当てている。ここでは、本学地域政策学部観光政策学科・安田慎准教授の論考に注目したい。インドネシアにおけるマッカ巡礼の団体旅行には、ウスターズと呼ばれる同行ガイドが大きな役割を果たしている。彼らは本業が「宗教的なイベントやセミナーにおける説教や、自己啓発本をはじめとする著作の出版やウェブ上での著述活動、その他にも宗教市場の関連サービスに関与するビジネスマン」（p.300）だという。ただし、専門的なイスラームの高等教育を受けてきた者は多くはなく、アラビアの運用能力も高くはない。にもかかわらず、彼らの説教や言説をツアー参加者が支持し、結果としてウスターズとして雇われること自体が社会的成功を収めたことと見なされるようになってきているという。これについて安田は、マッカ巡礼ビジネスに参画すること自体、個人が保持する資源に余裕があるからできることだと指摘する。つまり「イスラーム的な信仰の深さが社会的成功を生み出すのではなく、社会的成功がイスラーム的な信仰の深さを生み出す」という状況が作り出されているのだ（p.302-303）。そのため安田は「市場を通じた宗教実践の個人化と宗教的正統性の減退という側面よりも、新たなイスラーム的感性を社会に埋め込んでいくことで宗教的正統性の強化に作用していく」と結論づける（p.306）。このように安田論考は社会的成功と宗教的正統性とが結びつく現場と論理を見事に表象しているのである。

紙幅が尽きようとしている。上記以外にも優れた論考は多々あり、収載された各論考を1つ1つ丁寧に検証し、論点を深めることが望ましいことはいままでもない。願わくば、本書を手に取り、宗教と市場、宗教と観光、宗教と地域、宗教と文化などについて、議論を深めていただきたい。

【2020年8月刊行 弘文堂 384ページ 3,800円+税】

（すずき こうたろう・高崎経済大学地域政策学部講師）